長編小説

山嶽巨人伝

戸川幸夫

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思いますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。御職業、年齢などもお書きそえください。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

昭和三十四年三月二十日　印刷
昭和三十四年三月二十五日　初版発行

定価三二〇円

山嶽巨人伝

著者　戸川幸夫（とがわゆきお）
東京都港区青山南町六ノ五九

発行者　神吉晴夫

印刷者　盛英信

印刷所　慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区関口町一四〇

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚（94）一一〇〇―九
振替東京一一五三四七

（関川製本）

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

© Yukio Togawa 1959

はじめに

この小説は秋田県北秋田郡阿仁地方のまたぎ（狩人）部落を背景としています。筆者は磐司根子太という男の生涯を描くことによってまたぎの社会の変遷をのべてみたいと考えました。

日本の国造りは（日本に限らずどこの国でも同様ですが）狩人たちの手によってなされたといってもよいでしょう。

未開の山野に分けいって獣を狩る人々の集団にまじって、農耕する人々がはいってきて開拓し、山村を形成していったようです。

今日では狩人によって形成されている部落というものはなくなりましたが、それでも阿仁地方の部落部落はまだまだ狩人村としての形態を多少とも残しています。

狩りによって堅く結びついた素朴な人たちの特殊な社会は筆者には大変な興味を与えました。

特殊な社会――たしかにそうです。ですからこの小説をお読みになるために必要だと思われるまたぎ村の社会事情をお話ししておきましょう。

阿仁のまたぎ（小説の舞台である根子部落もその一つです）たちは山を神聖視し、山の獣を彼らが崇敬する山神さまの授けものと考えています。ですから山にはいるには全く邪心を去ってから行くことになっています。彼らの生活はすべて山神への奉仕という気持で行なわれるのです。

山にはいっては汚れの多い里言葉は使いません。作法も違ってきます。何百何十とある酷しい禁忌に触れたらただちに氷水を浴びて垢離をせねばならないのです。

村（荒瀬村）は十七の部落からなっています。小説の舞台の根子部落はその一つです。村には本村の荒瀬に肝煎（村長にあたる）が一名いて、これが村全般のことを支配していましたが、山の奥に散らばっている十七ヵ部落に目を通すことはできないので各部落に親方（部落長）を置きました。親方は地主とも呼ばれ、この親方の下にいわゆるまたぎ組制度が施かれていたのです。

つまりまたぎ組というのが一つの部落に幾つもありまして、このまたぎ部落の者である以上はどれかの組にはいっていなければならないのでした。このまたぎ組にはそれぞれ屋号のような組の名が世襲でついています。それがこの小説に出てくる七之丞組とか、伊之助組、善兵衛組などです。

またぎ組は組頭と小前（または小人ともいう）とからなっていて、組頭は世襲で、四人の組の者、つまり小前を持ち自分を加えて五人組で一単位を作っていたのです。組頭と小前との関係は親子のようなもので、小前同士は兄弟のようなつき合いをしていました。しかし、それだけでは小前が組頭に遠慮して言いたいことも言えないといけないので、別に小前頭というのがあって、これが小前と組頭の間をとり持つ相談役のようなことをしていたのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼らが狩りに出かける時はまたぎ組単位で山入りをしたものですが、大物狩りの場合は幾つものまたぎ組が協力して行ないました。その場合、総指揮官役には組頭のうちで最も経験に富んだ、判断のよいまたぎがあたりました。これをスカリと呼んでいます。スカリの命令は絶対でして、たとえ親方や肝煎であろうとも山入りしてからはスカリの命令に従わねばならなかったのです。

山にはいるにあたってはまたぎ以外の者に会うことを極端に嫌いました。里の人と出会っても、

「あッ、セタギ（またぎ以外の者という意味）が来た」

といってすぐに水水で垢離をとるほどで、ことに女を嫌いました。女は月の汚れがあるという旧い考え方からでしょう。

同様に産のあった家や、死人の出た家の火を使ったものも嫌いました。臨月の妻をもっている夫が加わると鉄砲が不発であるとも言われました。

今日では、もはやこんなことも言いませんが、こういったまたぎ組制度や禁忌は第一次世界大戦のころまではやかましかったのです。今は土地の古老たちが僅かに山言葉や山作法を伝えているだけです。

筆者はこれらの山言葉や作法や、制度を小説の上で再現してみました。旧いまたぎの社会が、新しく変わってゆく姿を対比させてみたいからでした。

昭和三十四年二月　　青山にて　戸川幸夫

目次

はじめに……一
春またぎ……九
啞童（おつわらす）……二一
梟（ののすけ）……三三
くそ蛇……四七
螢火（ほたるび）……六一
大洪水……七四

秋イズミ……八七
熊穴……一〇〇
鷹の眼……一一三
白い牝鹿……一二六
女担ぎ……一四〇
山の犬っ仔……一五三
滝壺……一六六
虱……一八一
四本指……一九五

若衆小屋……二〇八
またぎ旅……二二三
白い宮殿……二三六
疾風の鴉兵衛……二五〇
一本手の男……二六四
洞窟の白骨……二七八
七人の狩人……二九二
夜明け……三〇五
金色の雲……三一九

長編小説

山獄巨人伝

裝丁　中尾　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春 ま た ぎ

ゴーッ、ド、ド、ド、ドッ、ドッ、ドッ、……またしても雷鳴が轟き、大地が揺れた。初めは目に見えぬほどゆっくりと、そして後からは滝となって白い大地は走った。

山は終日、雪崩の交響楽に満ちていた。雷鳴に似た轟音は尾根尾根に谺し、山彦はさらに雪崩を誘って傾斜面を一日一日とむきだしにしてゆく。

（とはいうものの）嶺から縦谷にかけて、そして尾根から谷地にかけて、見はるかす視界はまだ白の支配下にあった。氷は山襞や岩畠にがっしりとしがみつき、その上を根雪、核雪が鎧い、一番うわ皮をつい二日ほど前に降った春雪がふんわりと包んでいた。

嶺を渡る風は凍みていたが、その酷しさの中にもほんのりと和らかみが滲みつつあった。

鉛色に重苦しく澱んでいた尾根の雪雲にも動きが加わって、雲の破れから太陽が顔を出すようになると、山は急激に変わってくる。

太陽はすでに初夏の顔であった。春は遅まきではあるが確実に山麓から這い上がってきて嶺の眠りを覚まし始める。すると山は身ぶるいして雪を飛ばす。光の束は春雪を溶かし、風がそれを凍らせて核雪に変える。時には黝ずんだ空から春雪に混じって柔らかく雨が落ちた。そうしてこれらが傾斜面を走る

全層旧雪雪崩を創りだし、春山に分けいる山人たちを脅かした。
羽後と陸中に跨がるここ駒ケ岳男嶽の山腹の五月はこうして息吹いていった。
厚い雪と氷の下で窒息したかに見えた山肌は甦りつつあった。重い氷の底で、大地に沿って氷水がほとばしり至るところにトンネルを穿ち、山蕗が薹をもたげ、ウルイや、水芭蕉や、熊笹が萌えの支度を整えだす。
その頃になると熊の「春雪踏み」が始まる。長い冬の間を岩窟や土穴、木の洞などで飲まず喰わずにうつらうつらと眠って過ごした熊たちの蠢動期なのだ。春の訪れを身近に感ずると熊は眠りから覚め、穴の口まで這い寄って懶げに外を眺める。外界はまだ雪が厚く、雪崩が轟き渡っている。
外の空気を美味そうに吸って、射し込んでくる春の陽に身干しした熊は、そろそろと雪渓の上に足を伸ばす。冬眠中にすっかり柔らかくなった蹠はまだむき出された岩壁の上は痛くて歩けない。足ならしの四、五日、吹雪けば穴に潜る。そしてだんだんと足を丈夫にしてゆく、猟師たちのいう「出遊び」の季節なのだ。穴から出はじめた熊たち（地どり熊という）は春の訪れは恐ろしい狩人や嫌な犬どもの訪れを伴っていることを本能的に知っていた。だから出遊びの期間を出来るだけ短く終わらせて穴から遠ざかろうと蹠を鍛える。
穴熊（羆ではなくて冬眠の穴に籠もっている熊のこと）は肝が太い——と猟師たちはいう。運動しないで穴に籠もっていたために肥大した肝をとろうと猟師たちは雪崩の危険を冒して登ってくる。
これは時の刻みに生命を賭けた人と獣の勝負であった。
熊が冬眠の穴から出るといっても一斉にぞろぞろと這い出すのではない。猟師たちはその順序を「一

にウゲヅキ、二に、二ゼ三ゼ、三にナミモノ、四にオオモノよ、五つ遅いがワカゴモチ」と伝えていた。ウゲというのは二歳熊のことであった。母熊はその仔を二歳まではつきそって育てる。二歳熊はもうかなり体も大きくて、この仔熊たちに乳を飲まれる母熊は、痩せて空腹になり一番先に穴を出て餌を漁るというのだ。二ゼ三ゼとは母から離れた二歳熊、三歳熊のことを呼ぶ。三番目に穴から出るのは普通熊で七、八歳のもの。三十貫以上に達した巨熊は悠々と這い出し、最後に出てくるのが赤ン坊熊を抱いた母熊だった。熊は冬眠、絶食中に牡牝一頭ずつの仔を産む。そしてその冬生まれたばかりの仔熊は足弱で十分に歩けない。体力がつくまで危険を冒して母熊は穴に頑張るのだ。

ところで男嶽の縦谷にのっそりと姿を現わした片耳はこの中のオオモノに属していた。年齢は四十歳を越し、体重も六十貫に近かった。彼の長い生涯の間にもう数発の鉛弾を肉体に止めていた。右の耳が根もとから切れ落ちているのも一昨年の春、刺巻猟師の与茂七を殴り殺した時に片刃槍で削ぎ落とされた名残りだった。

駒ヶ岳の片耳、朝日嶽の瘤熊、八幡台（このころは八幡台と書いた）の四本指は羽後の三熊として知られていた。

片耳は雪渓をおりて雪の裂け目からほとばしっている氷水を音をさせて飲んだ。雪を掘って若芽をむしって喰った。すると腹がゆるんで消し炭のような糞をした。

その時、片耳はなんとなく嫌な予感を覚えて一本の耳をそば立て、周囲に気を配った。風の流れに人間の体臭が匂ったのでも人声や犬の叫びが乗ってきたのでもなかったが、鋭い野獣の勘だった。本能の知らせともいえた。

危険が近づいてきているのを知ると片耳は低く唸り、用心しながら傾斜面を登っていった。それから小半時もたたなかった。雪渓に沿って走るような速い足どりで登ってきた六人の山男があった。

彼らは一様に同じ服装をしていた。誰も一言も発しなかった。引率者と見える一人の老人を先頭に一列になっての影のように音もなく登ってきた。汗ばんだ顔も、息切れの喘ぎも彼らの間にはなかった。

近づくを見れば老若の差こそあれ、いずれも一癖も、二癖もある面魂で、よくこれで、丈余の雪山に分けいれるものだと驚くほどの軽装だった。

彼らは素肌の上に麻の襦袢一枚をまとい、その上に肘までの刺子を身につけているに過ぎなかった。各自、紺に染めた吹雪除けの前掛けを首から胸にかけて着けていたが麻布が保温の役目を果たすものでもない。下半身は木綿の半股引に麻の山袴、足には半ばき、腕には手甲をつけたが関節はむき出しで、雪除けの羚羊皮を背にまとい、同じ羚羊皮で作った手袋、足袋に、樏（かんじき）を穿いていた。

肩には火縄銃。それに獲物を入れる背負い網、食糧袋。顔は半分を手拭で巻き又鬼笠をかぶり、腰には火薬袋、鉛弾入れ、火縄筒、山刀、鉈、鉞、手には熊槍、雪篦を握っている。

その異様な服装から阿仁の猟師たちであることがわかった。

一行の指揮者と見える老猟師は、片耳の足跡を見ると片手をあげて皆の足を止めた。又鬼笠の下からこぼれて見える鬢髪はもうほとんど白かったが、雪灼けした膚はたるみがなく、眼は鷹のように鋭く光っていた。

「片耳熊の足跡だ！」

老猟師は低く呟いた。それは彼らの間でのみ通じる山言葉だった。山を神聖な御座として、また獲物

を山神の恵みとして敬いに明け暮れする山男たちの間では、山にはいっては汚れ多い里言葉を使ってはならない、という厳しい掟があった。

「山腹を横切って奥さ行ってンず」

老猟師の後に続いた四十四、五の猟師がいった。

片耳の足跡は雪渓の中途からそれて、彼がこの冬を越した穴とは反対の岩畠に向かって続いていた。

老猟師はその足跡の末にじっと眼を走らせていたが、

「片耳もお終えだ。俎畠サ行ってるス。あの岩壁で仕留めるだ」

と厳そかに五人のものにいった。俎畠——それは岩壁が迫ってそこに追い込めばまず獲物を逃がさない。ちょうど俎に魚を乗せたような岩場だ、というところから、そんな地形のところを猟師たちはこう呼んでいた。

片耳も追われたのなら決して俎畠へはいり込まなかったに違いない。狡くて、猟師たちの狩りのやり方を知っている片耳は、彼らの裏をかく手を持っていた。この場合、片耳は十分の距離があったので簡単に撒けると考えていた。そこに片耳の誤算があった。追ってきている連中が名人といわれた荒瀬村根子部落伊之助組の組頭、芳松に率いられたなうての山男たちで、その中には鉄砲にかけては右に出る者がないといわれた七之丞組の組頭磐司の松五郎も加わっていることを知らなかった誤算であった。

行手は鋸の歯のように鋭い岩肌を覗かせている男嶽の絶壁だった。コニーデ型複式火山といわれる駒ケ岳は女嶽、横嶽の火口丘を抱いて外輪山が峨々と連らなり、その最も高くそびえているのが、男嶽であった。

あそこまでゆけばこの季節には人間どもは追ってこれない――と片耳は考えたに違いない。

またもや雪崩が轟いた。雪煙は、霧のように立ち上り、尾根や山襞を消して沢に舞い下っていった。雪崩は雪崩を誘って次の尾根の雪庇が崩れ、尾根から尾根へと崩壊は続いた。それは恐らくこの春、一番の大雪崩にちがいなかった。山をゆすぶる轟音は猟師たちのところへも響きわたり、風花が舞いかかった。

一同は思わず顔を見合わせた。口には出さなかったが、どの顔にも不安と怖れの色が浮かんだ。それは雪崩を怖れたのではない。彼らの信ずるコダマネズミが暴れだしたのを怖れたのだ。それは山神の怒りを示しているからだった。

山入りをした猟師たちは自分らの身辺にコダマネズミと称する山鼠が棲んでいるという。それは狩人七人が化した霊だと伝えられ、背に三筋の火型がついている南京鼠ほどの山鼠で、山神が怒ると音を立ててはじける。その爆発音は大尾根を動かして雪崩を作りだす。だからコダマネズミのはじける時は狩りをしても獲物は獲れない、と信じられていた。

片耳は捕れねえ――と猟師たち(正確にいうと二人をぬかして残りの猟師たち)は心の中で危惧した。

老猟師の芳松は一同の顔色を見ると独り頷き、懐中を探って紙に包んだ物を敬々しくとり出し、額に捧げると、

「祓いをする」

といい渡した。五人の猟師たちは雪笹と熊槍を雪に突き立てて、首を垂れ眼を瞑った。

芳松が取り出したものはオコゼの干物で、山神が喜ぶといわれる魔除けだった。山神は醜い顔をして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com